林業支援ボランティア〈吉里吉里国〉　1～4班

吉里吉里海水浴場のほど近く、吉里吉里半島の付け根で、その名も吉里吉里国という NPO 法人が復活の薪（まき）プロジェクトに取り組んでいます。1 ～ 4 班の 26 名は、その活動の中心であるまき割りに挑戦することになりました。

澄み渡った青空の下、にこやかに出迎えてくださった理事長の芳賀正彦氏に、まずお手本を見せていただきました。おのの持ち方、構え方、ケガをしないまきの割り方、といった基本的な動作です。

痩身の芳賀氏が、御自身の胴周りほどもある丸太を軽々と二つに割ると、息を凝らして見つめていた参加者たちから驚きの声が上がりました。力よりもコツなのだと、芳賀氏は事も無げです。

それから、一人一人におのが手渡されました。まき割りは初体験という参加者がほとんどで、慣れない作業に全員が真剣な面持ちで臨みます。

初めは動きもぎこちなく、戸惑い気味の参加者たちでしたが、早ばやとコツをつかんで、次々と割り始める生徒も出てきました。なかなかうまくいかない生徒には、芳賀氏がマンツーマンで教えてくださいました。「剣道ってこんな感じなのかな」というつぶやきも、どこからか聞こえてきました。

苦戦していた参加者も、何度も繰り返すうちに少しずつ動作をのみ込めてきたようです。積んである山から丸太を選んでくる際、かなり太いものにあえて挑戦する者も見受けらるようになってきました。

作業終盤に入ると、全員のおのから放たれるコンコンとテンポの良い音が、晴天の空に吸い込まれていきます。遮るもののない日差しが照り付け、立っているだけで汗が噴き出る暑さの中、休憩をはさんで 1 時間以上、おのを振り下ろし続けた参加者たちに、芳賀氏から感謝とねぎらいの言葉が掛けられました。

作業後、芳賀氏から震災時の体験談を伺いました。

津波で家を失い絶望していた芳賀氏は、横殴りのみぞれの中、家族の名前を叫んで捜し歩くおばあさんに出会います。自分は家族も無事だった、この人こそが本当に悲しいのだと衝撃を受け、震災３日後、自衛隊等の支援もまだ来ない中、有志の若者たちと行方不明者の捜索を始めました。犠牲者の姿がまぶたに焼き付き、夜は眠れなかったといいます。

明かりも暖房も十分ではなかった厳寒の避難所では、たき火が 24 時間、３週間にわたってたかれました。

「たき火を何時間も見つめるうちに、なぜか心が澄んでくるのが分かった。もう失うものはない。亡くなった人の思いを背負って生きていく。被災者でいてはならない、助ける人になれとたき火が語り掛けているようだった。

行方不明者の捜索をしたのは名もない普通の人たち。その汗と願いが、震災前よりもっと良い町を作り上げるのだと気付いた。」と涙ながらに語ってくれました。

その後この活動を始めた芳賀氏は「木こりとしては〝ド素人〟」と謙遜します。70 歳になった今、「疲れて動けなくなった時、空を見上げると、あの時の人たちへの思いが募り、はってでも山を登ろうと体を動かす。」という実直なその言葉が、参加者の胸に刻まれました。

NPO法人 吉里吉里国
理事長　芳賀 正彦氏

本日は皆さんに〝まき割リスト〟の称号を、敬意を込めて差し上げたいと思います。私が行方不明者の捜索活動を始めたのは、頭で考えたのではなく、気持ちと体が動いたのです。そこに、防災士を目指す皆さんの、将来の活動につながる何かがあるのかもしれないと思っています。

●参加者の感想

人生で初めてまき割りを体験した。おのの重さや危険な作業で林業の厳しさが感じられたが、まきが割れた時にすごく達成感を味わった。	生徒
まき割りは力仕事であったが、自分たち高校生こそが災害時に様々なところで力仕事に期待されているのかなと感じた。	生徒
大きな災害では一瞬にして全てが無くなってしまうが、それでもあきらめないで強く生きることが大切であることを、ボランティア受け入れ先の方から教わった。	生徒
バスの中で聞いたボランティア受け入れ先の方の話は、心まで響いた。どこかで他人事と感じていた自分に真正面から突き刺さってきた。話し方、声、表情も含めて忘れることがない、岩手県を訪れたからこその体験であった。	教員